



ANCオリバータンボ全国議長と握手する長谷川さん
水俣の柏木敏治氏の歌(カセット)を渡す

いぜんつづく黒人差別

南アフリカ訪問報告集会ひらかる

「アパルトヘイトを考える

「南アフリカ訪問学習集会」
が十一月二十二日夜、熊本市
の産業文化会館でひらかれま
した。

アジア、アフリカ、ラテン
アメリカ、太平洋諸島に流し
A) 熊本支部(連)が主催した
もので、二十人が参加しまし
た。

これは今年八月、同委員会
が企画した南アフリカ共和国
友好訪問団の一員として参加
した長谷川博さん(菊陽病院
勤務)の帰国報告集会として

行なわれたもの。

長谷川さんは「アパルトヘ
イトは廃止されたか? 南ア
を旅して」と題して報告。豊
富なスライドを使って、見た
まま、感じたままの現状をの
べました。

悪名たかい「人種差別法」
は撤廃されたものの、黒人に
たいする差別は依然としてつ
づき、警察の弾圧も弱まって
いない現状。

「私たちが捨てた弁当の空
箱を黒人の子供が奪い合い、
骨をしゃぶったり、ジュース

缶をすすったりしていた。」

長谷川さんは、その情景に
胸がつまったといいます。

また現白人政権は、部族同
士を対立させてそれを口実に
弾圧を加えるやり方をあおり
暴力行為が絶えないとの報告
も。

「日本政府は、さつそく貿
易制限を撤廃したが、これは
南ア政府の欺瞞政策をかばっ
ているようなものだ。私たち
は真の人種差別撤廃が実現す
るまで連帯する必要がある。」
と長谷川博さんは強調しまし

た。この集会では「合唱団し
らぬい」がアフリカの歌を合
唱したのをはじめ、シンガー
ソングライターの柏木敏治さ
ん(水俣在住)がギター独奏で
数かずの歌をうたい会場を盛
り上げました。

長谷川博氏は、南アフリカ
のアパルトヘイト法廃止後の
現地ルポ、「南アフリカの流
砂」を出版しました。

熊本民報は、次号から長谷
川博氏の南アフリカ訪問記を
連載いたします。

アパルトヘイト法廃止後の南アフリカをゆく

①

熊本 AALA

長谷川 博

義務教育での社会科の授業で「南アフリカ」イコール「アパルトヘイト体制」という図式のみを記憶させられた覚えがある。

地球儀を、くるくる回して眺めると、アフリカ大陸の南端に喜望峯とある、この場所の存在する国が「南アフリカ」で、この国で何が起ったのか、そして現在を知る日本人は少ない。

熊本に AALA (アジア・アフリカ・ラテンアメリカ)

連帯委員会準備会が発足して二年になる。この AALA の最初の行事は、「南アフリカ」の学習会であった。はじめて知らされた内容は驚くべきものであった。

一九七六年ソウエトの蜂起にたいし、警察の発砲で、小学生を含む千人近い児童・生徒が殺されたという。その原因は、支配者の言語(アフリカーンス)を学校教育に導入するという強制にたいしての反対デモの最中のことと聞い

て啞然とした。

昨年十月には、反アパルトヘイトコンサートを企画し、遠くは天草から、歌い手は水俣から参加し、南アフリカの早期民主化へと連帯した。

今年六月には、日本 AALA では各県からの「南アフリカ訪問団」の募集がおこなわれ、その目的は、アパルトヘイト法廃止後の南アフリカの現状をみて、日本の連帯活動に生かすこと、日本の現状を南アフリカ人民に報告し、交

流することであった。

その一員として、熊本から私が参加することになった。

その訪問記を「南アフリカの流砂」まとめたが、「熊本民報」に以下のように連載して報告としたい。

①南アの現在(ソウエトの現在)

②南アの暴力について

③学校について

④医療について

⑤ANCとその周辺

旧黒人居住区ソウエトのこと ①

熊本 AALA
長谷川 博

●現在のこと

私たちが訪問した一九九一年八月の南アフリカの旧黒人居住区では、アパルトヘイト基幹法廃止後も、どこふく風のように、子どもたちはゴミ捨て場をあさり、街に職のある親たちは安い賃金で白人の下働きをしていた。

また一部の保障された住環境を除けば、それこそ劣悪で電気も水道もない、ダンボールやトタンのシャック(掘立小屋)が湿地帯に広がり、子どもたちは有料である小学校

へも通うことができないでいる。比べて白人の義務教育は無料)

確かに法律的には廃止された。しかし現在、どのように変化しているのだろうかという比較はむづかしい。

タウンシップ(黒人居住区)ソウエトには治安部隊の常駐もある。

さらにアパルトヘイト体制を続けさせようとする政府の資金がインカタ自由党(南ア最大人口を要する黒人部族ズール族中心に結成された族

党)に流れた事実もある。

そのインカタによるタウンシップ居住者攻撃が目下の重大な問題である。(年に何千人と殺されている)

南のケープタウン郊外のカエリチャタウンシップでは、軍と警察によるANC(アフリカ民族会議)構成員を中心とする攻撃は一段とすさまじい状況にある。

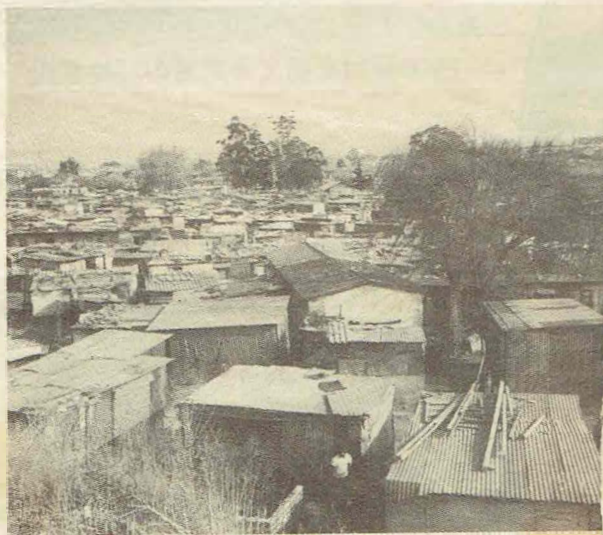
口ではデクラーク政権は「アパルトヘイト体制は終わった」と世界にむかって宣言する一方で、金銭的支援により

黒人組織を使ってANC攻撃に終始している。それは黒人の権利を拡大しようとする人々を標的としている。これらの結果をみると白人政権は、真の平等を拒むような雰囲気

でもある。

それを知ってか知らずか、日本政府は国連安全保障理事国に日本が選ばれた直後の一九九一年十月二十二日対南ア経済制裁解除を発表した。

一人一票制などの真の平等をおしすすめるためには、今こそ経済制裁を、という黒人



スコッターハウス(ソウエトの深部)



南ア訪問記「南アフリカの流砂」

(11) 第1100号

旧黒人居住区ソウエトのこと②

熊本 AAL 長谷川

●かつて起つたこと

「ソウエトの蜂起」知って
ますかとある新聞記者に聞いて
みた。「ソビエトのことです
か」と返事がかえってきた。
世界の情勢が商売の記者でさ
えこの程度だ。日本の一般の
国民が知っていることが珍し
い。

政府が押しつけるアパルト
ヘイトを作りだしたオランダ
開拓者の言語が元のアフリカ
インス(ドイツ語によく似て
いる)これを黒人教育に導入
し、これで授業せよという。

一九七六年六月十六日、黒
人学生は、これに反対してソ
ウエトの小、中、高校生約二
〇〇〇人がデモ行進。西オル
ランド地区で、この子どもた
ちのデモ隊に警察が銃による
発砲を開始。デモの先頭を歩
いていたイエツベン小学校生
徒のヘクター・ピーターソンが
射ち殺された。

その後大人も含め八〇〇人
もの死者が出たが正確な数は
いまだに不明だ。当局発表は
五七五人)
たくさん子どもたちの死

のあとに、黒人は意識して白
人と対峙することになる。
そのきっかけを子どもたち
が作りだしたのだ。
そこで「ソウエト」以降と
いう言葉も生れ、黒人の開放
運動の高揚のきっかけとなっ
た。

この事件は、世界中にニュ
ースが配信されたというが、
一九六一年以降アパルトヘイ
トを支援した功績での名譽白
人、白人政権とのパートナー
であり続けた日本では、こと
さら意識して大見出しの記事

にしなかったのであらうか。
恥ずかしいが、私の知るき
っかけはつい二年前の AAL
Aの学習会でのことであつた。
今回の旅では、このときの
犠牲者であるヘクター・ピー
ターソンをはじめ多くの子ども
たちが眠るソウエトの墓を訪
れることができた。

残酷な体制に命を奪われた
人々が、この南アフリカでは
多く眠っている。

南アフリカをゆく④

南アの暴力の問題①

熊本 AAL A
長谷川 博

南アフリカでいう暴力=殺
人(murder)であるとい
つても過言ではない。

南アフリカで「暴力」とい
うのを考える場合、日本のよ
うに単純な犯罪が要因なこと
と趣が異なっている。

まず第一に政権、体制を維
持するための明白な国家権力
による弾圧。第二に国家が第
三者に資金援助などをして目
的の人、団体などへの暴力。
第三に譲れない各ポリシー故
の対立、極左、極右、労組の
主張などによる暴力。第四に
純粋な犯罪それも貧困や抑圧

が原因の暴力である。そして
第五に国家権力に結びつく職
業的殺人集団によるものもあ
るらしい。ほぼこれら五つの
条件のいずれかに当てはまる
と考えてよいだろう。さまざま
じい国である。

私が南アでの暴力を直接肌
で感じたのは、ヨハネスブル
グ郊外ソウエトでのインカタ
による居徒者への攻撃(第二
の例)、ケーブタウン郊外旧
黒人居住区カエリチャ地区に
おけるANC幹部宅への残虐
行為、(これは警察や軍隊が

関与した第一の例)。この二
地区では家族が殺されたりし
て残された子どもたちや関係
者にあつた。

カエリチャ地区では、我々
の訪問する二週間前に、一家
(お母さん、姉さん、二人の
兄さん)がその家に閉じ込め
られたあげく、外から手榴弾
を投げ込まれ、さらに火をつ
けられ、窓から逃げ出そうと
する一七歳になる姉にむけて
銃を発砲。それを一部始終見
せられた七歳の少女と事件当
日外出から帰って事件を知っ

たというその父親(ANCカ
エリチャ支部長)の話を聞く
機会があつた。

楽しかった家族とのことと
事件当日の話を交差して思い
出し、下をうつむきばなしの
少女の姿が哀れでならなかつ
た。私の子どもが丁度同じ年
令だったこともあり、その現
場でたまたむ少女の気持を想
像して涙が出てとまらなかつ
た。
犯人は訓練された殺し屋で、
軍隊か警察であるということ
だ。黒人の権利拡大をめざす

ケーブ周辺のANC活動家の
ねらいうちが現在も続してい
るのである。情報によるとな
お一段とひどい状況になりつ
つあるとのことである。
さる九月一四日、ANC、
インカタ、政府は和平協定に
調印したが、このなかで警察
の行動規定の範囲を決めたに
もかわらず、このケーブ近
郊の警察、軍の行動には目に
あまるものが依然として存在
するという。ANC側から追
及すると、まだプレトリアの
警察本部からは、それらの指
令はまだ届いていないという
返事が返っているという。
(一〇月段階)



インカタの攻撃で両親をなくした子どもたち



ソウエト表面の顔(一般観光客はこの付近まで見て帰っ

南アの暴力の問題

②

熊本 AALA

長谷川 博

アパルトヘイト体制化の三・四年前まで、南ア警察による拘留中の拷問などで多数の死者が続出した。

ちょうど日本における戦前の治安維持法違反事件における共産党員作家・小林多喜二が日本の特高警察に検挙され、拷問で虐殺されたのと同様な事件が頻発しているのだ。

一九七七年九月十六日に警察の拷問で殺され「黒人よ！誇りを持って」と遺言を残して去ったステイブ・ピコの場合もある。南ア国内では一九六三年以降のアパルトヘイト

体制における警察での拘留死は百人から数百人に達するという。黒人の権利運動の高揚のためあって、小・中学生を含む未成年者の逮捕も年間一万人に達したという。また昨年一年間で、第二のいわゆる黒人間暴力での死者は、四百人に達した。日本では報道される暴力は単に、部族抗争として伝えられることが多い。

しかしこの抗争は、ANC（アフリカ民族会議）対インカタ（IFPインカタ自由党）という図式が主要となつてい

る。ANC攻撃のために、インカタへ現政権が資金を供与したとして大問題ともなっている。実行にあたり、デクラーク大統領の関与も取りざたされ、二閣僚の更迭騒ぎにもなっている。

さらには、これに第三にあがたポリシーゆえの暴力にもつながっている。南ア労働組合会議（COSATU）は、アフリカ民族会議（ANC）をサポートしている。このため傘下組合である全国鉱山労働者組合（NUM）とインカタ自由党系組合員との流血騒ぎが目下進行中である。

もともとの原因は付加価値税反対ゼネスト決行での、ゼネスト賛成派と反対派の間での流血騒ぎで、すでに百人以上が死亡して事態はまだ収拾されていない。

第五の職業的殺人者の問題もある。人殺しを訓練された集団組織があるという。これは極右のアフリカーナ抵抗運動などもあるが、もう一つ重視しなければならぬのは、南ア防衛軍（SADF）である。

たまたま買った現地の新聞「ニュー・ネーション」一九一年八月二十三日号で、彼らは「我々の偵察連隊のメンバーの九〇％は近隣諸国から、SADF」によって拉致され、一般市民を巻き添えにした虐殺行為を行なわされてきた」と話している。

アパルトヘイト法撤廃後の暫定政権を目指す黒人のたたかいが進行している現在、この暴力の手助けとなる日本政府の経済解除を愚行だと訴えている。

南アの学校の現状

①

熊本 AALA
長谷川

白人政権は、黒人を統治しやすいように、巧妙に知識・教育を身につけることを遠ざけていた。

一九五三年制定のバンツール教育法は、人種別教育でアフリカ人の地位向上阻止を目的として、教育費を受益者負担にし、理科・算数・社会科学などの履修を制限したものである。さらに学校建築費まで

黒人の親に負担がくる。黒人には、三人に一冊の割

でしか教科書が印刷されない。そしてこの制度は現在もなお生きているのだ。

現在、黒人の義務教育は、小学校五年、中学校五年である。そのうえ高校・大学とす

すむことのできる人は、ほんの一部（大学を卒業できるのはわずか一％）である。その義務教育も、黒人は有料、白人は無料である。

今の黒人の小学校は、もう満杯の状況で、一クラス一〇

〇人が標準である。教える側の教育もバンツール教育の環境で履修してきたので「教育の質の改善も必要」であり根は深い。

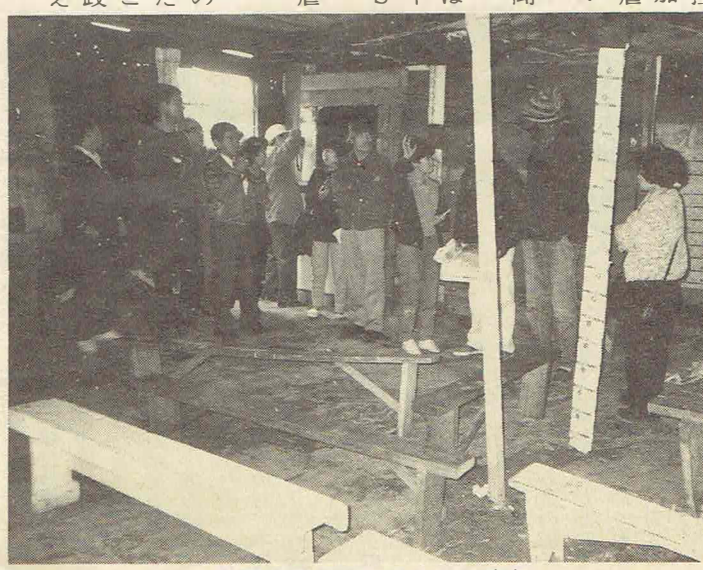
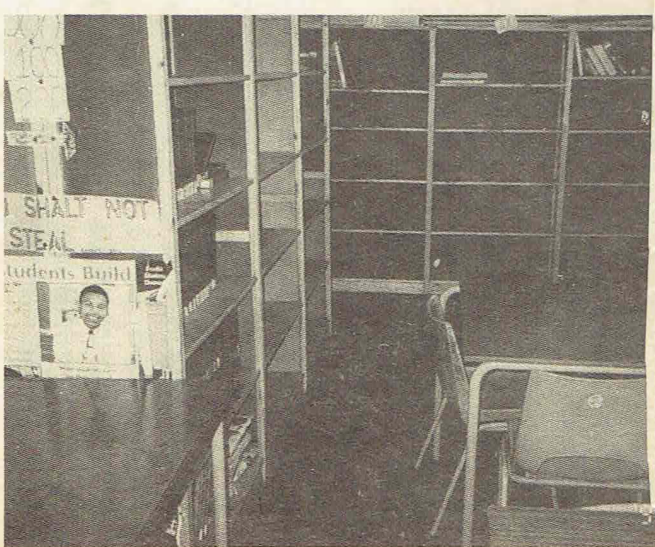
教育によって仕事の質も高まる。黒人ビジネスの責任者NAFCCOCのモチャヤネ会長も「黒人の技術獲得が今、非常に困難である。バンツール教育を受けたダメージが自らの首を絞めているようなものであり、早急な改善が求めら

れている」と強調する。ソーシャングベタウンシップの小学校校長スザナ・パサモサカさんの話では「一クラス一〇〇人もの子ども達は、ただ学校で教師と一緒に過ごしたというだけで、真の教育には程遠い」という。

ソウエトの二〇〇〇名近くの生徒数の、オランダウェスト高校の図書館の蔵書も日本の田舎の生徒数六〇〇足らずの小学校の蔵書の三分の一に

達捕されている。警察の発砲で、一四才の子どもが殺されたり、重傷を負ったり、多くの教師や学生が逮捕されている。

ほとんど改善が見られないこの南アの学校教育現場におけるアパルトヘイト法廃止後の現状である。



家族が焼き殺された家の内部

南アの学校の現状②

熊 AAL
長谷川

訪問中の南アの新聞に黒人の通う学校の現状というのがあった。

うきゅうに詰め込まれた教室では、暗い黒板を生徒は眺めているのだ。

黒人の学校へ、白人の女生徒が体験入学するのであるがその時、理科教室は外庭であった。顕微鏡のかわりにプラスチックのルーペ、実験材料は教師のポケットマネーで揃えるといった案配で、黒人教育の環境が具体的に述べられている。

一昨年二月、デ・クラーク大統領の「教育の均等」宣言が、全く言葉だけであったことが容易に知ることができる。

現在の教育や、医療にたいする蜜行を正すという圧力(言葉)を換えると経済制裁の続行などが何故かけられないのであろうか。

アパルトヘイト後の日本の対応として、経団連の調査も詳細にされている。アパルトヘイト体制に力を貸してきた日本政府、財界による、上っ面の体裁確保による資源輸入と市場確保の面だけではたいている日本である。

一人一冊もない教科書を写しあい、電灯さえなく、ぎゅ

この度日本政府は、南アとの外交関係改善の目玉として、黒人教育、医療にも支援することを、南アとの外交関係に関する政策のなかに盛り込んでいるが、面と向かって改善の条件として、政治的に南ア

アパルトヘイト後の日本の対応として、経団連の調査も詳細にされている。アパルトヘイト体制に力を貸してきた日本政府、財界による、上っ面の体裁確保による資源輸入と市場確保の面だけではたいている日本である。

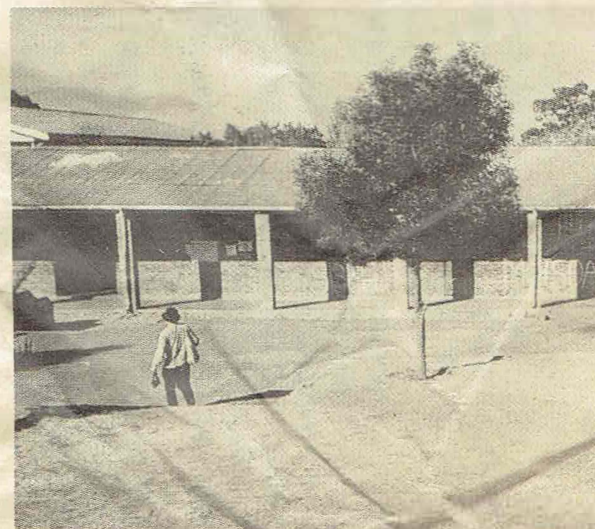
もはや彼らが、この国の主人公になるという事実、あと戻りは無いであろうことを確信した。

一人一冊もない教科書を写しあい、電灯さえなく、ぎゅ

この度日本政府は、南アとの外交関係改善の目玉として、黒人教育、医療にも支援することを、南アとの外交関係に関する政策のなかに盛り込んでいるが、面と向かって改善の条件として、政治的に南ア

アパルトヘイト後の日本の対応として、経団連の調査も詳細にされている。アパルトヘイト体制に力を貸してきた日本政府、財界による、上っ面の体裁確保による資源輸入と市場確保の面だけではたいている日本である。

歌のとおり「神の祝福あれ」と遠い地から祈ろう。



運動場もない、段差だらけの校庭

南アフリカをゆく

⑧

医療の現状①

熊 本
AALA
長谷川 博

●西ケープ周辺の医療

黒人医療について、西ケープANC保険衛生局書記である女医のカミイ・チュテイさんと、ソシヤルワーカーのピアン・テイラーさんに聞いた。

旧黒人居住区における健康状態は、ひどい貧困状態で、五〇％は栄養失調で、それも〇歳から一四歳の子どもたちで占められているという。

また乳児死亡率も、ところによっては、一三〇/一〇〇〇(一〇〇〇人の誕生に一三〇人は一歳までに死んでしま

うで、比べて白人はごくわずかである。(ちなみに日本は五/一〇〇〇)。

子ども達の死因は、「第一にはしが、第二に下痢(嘔吐を伴ったもの)、第三に肺炎、四番目に結核」と続く。

日本では考えられない死因である。

「特に西ケープ周辺での結核罹患率は南ア一、いや世界一かもしれない」黒人のための施設、二つのデイホスピタルと、二つの診療所への予算はわずかであり、治療に十分な薬品も欲しい、南アの黒人

の子どもにとって予防接種など全く考えられない」とも言われる。

西ケープの医療予算の七〇％は、白人用の二つの大病院に集中している。そのなかの一つが、心臓移植で世界に先駆けて成功した病院である。

医療の面でも白人優遇で、ANC保険衛生局は、黒人について予算の増額を交渉している。

黒人労働者の汗が、南アの経済を支えているながら、相応に還元される民主国家になることが、早急に望まれる。

南アの公式統計でも、人種によって、平均寿命は大きく異なる。黒人は白人より十一歳も短命だ。

黒人医療への予算の増額で、乳児の死亡原因の「はしか」や「結核」など、救済できる疾病も多い。

ブレトリアでは、医学部は白人・黒人と独立して存在する。

診療相手も、黒人医師は黒人しか診察できない。

まだまだ医療の場でも平等はほど遠い。



モフォオサラスで病院を追い出された病人

〈ソウエトの医療〉
(心細い施設)

〈バラグアナス病院〉

二五〇万都市に、入院可能ベットは二四五〇床のバラグアナス病院一ヶ所、この病院はヨハネスブルグ病院の黒人セクションとして発足。(土台は英連邦軍病院)。

外にクリニックは五、六ヶ所あるが医師は勤務後の夕方からは不在だ。

本格的に手術や検査、入院できる病院が、熊本市の人口

医療の現状 ②

熊 本
A A L
長谷川

の数倍にたった一ヶ所で、病弱な家族や子どもをもつ親は非常に心細い。

予約もしないで訪問すると、まず駐車場に通じる玄関でタクシードライバーは足止めされた。根強い交渉の成果で、渉外課までは行けることとなり、日の丸のバッジが用意されていた。

世界中のバッジがあり、あちこちからの見学者が訪問している様子である。

我々は、病院の中を見学させてもらえるものと期待して、エレベーターで渉外課を訪れ

たが、白人の女性係員は「予約がないからダメ」とはつきり断わられた。

黒人のタクシードライバーは我々に同情して「遠くからきたのに、ほんとにあれこそアパルトヘイトの現実なのです」という。

ある人の話では、ベットが満床で床に寝床をしているときもあるという。

広大な病院敷地に、黒人の患者や医師が往来していたが、病院案内を見ると主要な管理者はほとんどが白人である。

ソウエトでは、仕事をしているかぎり病院にかかることができるが、支払い金額は結構高い。一週間も入院すると一月分の給料以上の治療費がかかる。失業者や収入の少ない人は、モフォロサウスで見た「星古い」に薬草などを処方してもらった。

日本でも国民健康保険料が支払えず、病院にかかれない人が増えているが、ここ南アでも貧者は満足な医療を受けられずにいる。

モフォロ地区で訪問したあ

に坐り込んでいた。一家の稼ぎ手が失業したのだ。

このバラグアナス病院での医療費支払い区分での、公的

急増しているという。私的治療には、外来で専門的治療が受けられるなどの特典はあるが、支払いは高い。一日の通院で一万三千円ほどいるとい

療に耐えうる高所得者が、貧富の差ができつつあ



バラグアナス病院を背に記念撮影 (左は新婦人から参加した鈴木さん)

南アフリカをゆく ⑩

ANC(アフリカ民族会議)とその周辺

熊 本
AALA
長谷川 博

周辺組織の現在

アパルトヘイトの法的根拠は、昨年南アフリカから消え去った。

ヨハネスブルグ市内では黒人、白人が行き交い、ニューヨークカンドンかという雰囲気である。しかし内実は収入をはじめ、これまで述べてきたような医療、学校、住いなど歴然とした格差も存在している。

さらに、黒人白人間の経済格差も拡大するばかりである。

シップ居住者、ホームランド居住者でそれぞれ異なり、学歴差もある。ソウエトのビバリーヒルズと呼ばれる一角は、超デラックスな黒人資産家の家が林立している。(マンデラの家もこの一角にある。)

また、黒人間の諸組織の運動方針は、バラバラの様子。特にインカタ自由党、アザニア人民機構(AZAPO)、凡アフリカニスト(PAC)など

では、白人と一緒に行動するANCと共同することを避けている。

欠席したりして足並みは揃っていない。

このような状況下、昨年十月に十九の政党、組織の参加した「民主南ア会議」(CODESA)以来現在まで、デクラーク大統領の提案は、黒人のホームランドのような白人ホームランド(白人の利益を擁護)を作ることと、白人右派勢力に答えたりしている。

事態は、混沌としていて暫定政権までの遠い道のりを匂わせている。

受け継ぐAZAPOは、左翼過激派的存在で「白人とは異なる」という合言葉に、最近の南ア公演に反対を表明し、爆弾を興業事務所に投げつけるなどしている。彼らの考えは、ビコの精神を超越して「黒人優越」に近いくらいである。

PAC(凡アフリカ主義者会議)は、南アを白人から解放し、国の名称をアザニア国に改変するという計画も持つ。最近、共同通信特派員のインタビューで、かつてのビコ夫人(ケプタワン大学副学

長)が登場し、現在の黒人運動の状況を「差別や抑圧を、唯一の根拠として、それゆえに援助せよ」という運動は誤りで「自らの努力で困難を切り開くべきだ」と論じている。

白人政権と交渉の場を重視するANC(アフリカ民族会議)の役割はますます増大している。

南アの街角で会った、黒人のタクシードライバーのほとんどが、ANCを支持するといっていた。いわばANCは、黒人代表の核といったところであらう。

今もし黒人に選挙権があったら、七割以上が『マンデラ』と書くといわれ、対等な一票が黒人に付与されることの白人政権との平和的な「たたか



ANC本部会議場から見たヨハネスブルグの夜景

ANC本部訪問①

熊本 AALA 長谷川

ANC本部は、ヨハネスブルグの中心街二十二階建てのシェル石油を買い取っている。一九六一年シャープビル事件以降、非合法化された組織が、合法化後わずか一年の間に巨大なビルに本部を移し、堂々と市民権を得ていることは驚くべきことであった。

だが一方、ANCへの暴力攻撃は、白人過激派のみでなく、インカタをはじめとする黒人組織でも闘争方針を異にする団体・個人からもあり、防衛が必要なため、厳重な警備と出入りのチェックがされる。

その際、日本からの訪問団にたいし、シリル・ラマフォサ書記長は「アバルトヘイト基幹法撤廃という現在の到達点は、不屈な人民のたたかいの結果であり、同時に世界各国の経済制裁を軸とした国際

連帯の成果だ。」と日本での活動に感謝を表された。これにひきつづき、これからの主要課題の憲法改正、一人一票制を確立するためのプロセスと展望を語り、そのしめくりに「黒人の権利獲得の過程を、沸騰直前のポットの湯に例えて、途中で電気のスイッチを切らないでくれ、もしそのスイッチを切ったら元の水に戻ってしまふ」と日本からのたたかいへの支援を強調される。

マンデラ氏と改革のパートナーと日本のマスコミで評されていたデクラーク政権の評

価を「デクラークは最近二人の閣僚を更迭した。一人は国務大臣、もう一人は警察の長官である。政府は二枚舌政策をとり、政府の資金がインカタへ流れ暴力をづけさせた」と不信を隠さない。「一方では暴力でANCへの揺さぶりをかけておきながら、また一方では、みなさん御存じのよう甘い言葉を使っている」「インカタゲート事件の発覚で、閣僚を更迭したのは、自らの責任を認めたからには可成りいい。デクラークの手は、人民の流した血にどっぷりとつ

翌日の八月二十三日は、オリバー・タンボ国議長に会うことができた。

四十四人一人づつと軽く挨拶を交わし、未だ療養中でもあり、不自由な右手のかわりに左手での握手である。

ANCにおけるこれまでの彼の存在は非常に大きく、ネルソン・マンデラが獄中にある間、実質的には彼が指導してきた。

国民の権利、平等、平和などをうたった自由憲章は、一九五五年採択したのであるが、この普及にも全力を注ぎ、これを力としてANCはUDF(統一民主戦線)など共同組織との連携を強化していった。

この憲章の普及にも彼はかか

立命館大学教授、馬原鉄男氏ほか三氏、右側に南アANC国際部長ターボ・ムベキ氏、国際局課長ユースフ・サルージ氏が出席して開始された。

南アフリカをゆく

12

ANCと日本民族の連帯―「解同」問題

熊本 AALA 長谷川 博

非合法下の暗黒時代の中で、ごく最近の一九八〇年以降を見ても、南ア政権は国外でANC組織員を五十人以上を暗殺している。南ア政権は、ANC狩りを目的に他国の人権、領土侵害を踏みにじること

に対し「南アでは飢餓に苦しみ、多くの困難をかかえた人たちがいます。実情をしっかりと把握され、ぜひ支援をお願いしたい」と訴えられた。

また、タンボ氏は「よく来てくれた」と一人ひとりに声をかけてくれたが、その長老を大事にするANCの心づかいも行き届いていた。

曲折があるが自由憲章がやがて憲法の一部となるであ

ろう。タンボ氏にも、長生きしていただいで実現の過程を目にしてほしいと願うものがある。

ANCと反差別国際会議

全解連のメンバーは、ターボ・ムベキ国際部長と会見して日本の部落解放同盟が中心としてIMADR(イマドリ

ル・国際反差別運動)を設立し国連NGO組織加盟を企画そのIMADRのメンバーからANCは手を引いたがよいとする申し入れを行った。

八月二十四日ヨハネスブルグ市内デボンシアホテル午後三時、会談会場には、通訳のANC東京事務所勤務員(当時)平野一成氏を中央に、左側に日本側代表全国部落解放連合会、村崎勝利副委員長、

「この時点では双方納得しているのだが……」

彼は我々AALAの訪問団

曲折があるが自由憲章がやがて憲法の一部となるであ

ろう。タンボ氏にも、長生きしていただいで実現の過程を目にしてほしいと願うものがある。

全解連のメンバーは、ターボ・ムベキ国際部長と会見して日本の部落解放同盟が中心としてIMADR(イマドリ

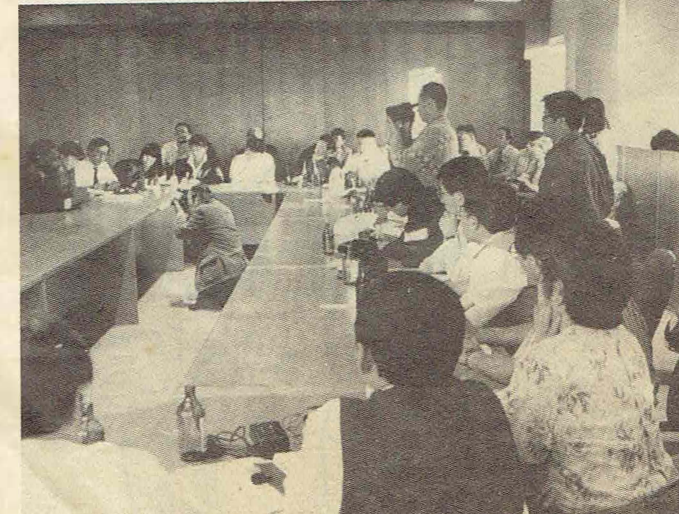
ル・国際反差別運動)を設立し国連NGO組織加盟を企画そのIMADRのメンバーからANCは手を引いたがよいとする申し入れを行った。

八月二十四日ヨハネスブルグ市内デボンシアホテル午後三時、会談会場には、通訳のANC東京事務所勤務員(当時)平野一成氏を中央に、左側に日本側代表全国部落解放連合会、村崎勝利副委員長、

「この時点では双方納得しているのだが……」



子供は、どこへ行っても人なつっこくカメラを



通告するだけで終わる。」として友好的な全解連とANC国際局長との会議は終了した。

南アフリカをゆく

あとがき—南アフリカを訪れて

熊 本
AALA
長谷川 博

一九九一年九月十七日、A
C国際部からは東京ANC
主席代表（J・マツイラー）
へ以下のように打電された。
「ターボ同志の東京訪問の
後、全解連が「IMADRが
日本の革新、民主運動に対す
る暴力、弾圧キャンペーンに
関わっていた」という偽情報
をANCにもたらしたことが
明らかになった。この問題が
国会議員によって解明された

ので、ターボ同志は全解連の
誤った情報にANCが戸惑わ
され不快を表明した。IMAD
DRとセルビ同志と到達した
合意の関係（IMADRの要
職にとどまるとよいとするこ
と）は、いままでどおりでよ
いのであり、全解連が始めた
攪乱情報キャンペーンをあな
たが拒否することを我々は支
持するのである。」
こうして一カ月もしない間

に全解連とANCとの同意は
一方的に破棄されたのである。
**連載を終える
にあたって**
この旅の結論として、まず
「人が人を支配すること、
差別する」という思想があること
について私たちは、もっと真剣
に考えなければならぬと思
う。
肌の色で東南アジアの人々

を西欧の人と区別していたり、
生まれの地で差別したり、ま
た血筋や学歴、思想、男女、
容姿の美醜などのおもわぬ
感覚的な差別が歴然と存在し
ていたりするからである。
さて、日本の民衆はアパ
ルトヘイト廃止に何をしてきた
か……民放労連や市民組織な
ど中心となってデ・ビアスの
ダイヤモンドの宣伝をやめさ
せたなど成果は沢山ある。獄

中にあったネルソン・マンデ
ラを釈放せよとの要請葉書売
りなども行った。
これらの世界人民との連帯
と経済制裁の結果によって南
ア政府はアパルトヘイト法全
廃へ踏み切った。
だが南アフリカを取りまく
課題は多い。
反アパルトヘイト釧路市民
の会の見解では、最近の「デ
クラ・クの基本政策の賛否を
問う白人投票の件では、危険
な賭けだ」と評している。
南アフリカでの見聞をふま
え、あの輝くことも達の瞳が
ふたたび曇ることのないよう
に、私は「南アフリカ」から
一生目をそらさず、関心を持
っていききたいと思う。

詳細については、私の書いた「南アフリカの流砂」発行
AALA熊本準備会・定価1
200円）をぜひ

